

<b>Title</b>	大学教育における、サービスラーニング導入の可能性について
<b>Author(s)</b>	川田, 虎男
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 17-25
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4980">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4980</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 大学教育における、 サービスラーニング導入の可能性について

川田 虎男

## 1. はじめに

### 1-1 研究の背景と目的

現在、大学教育におけるサービスラーニングの導入が注目されている。本研究においては、現在アクティブラーニング手法である、サービスラーニングが大学教育に導入されつつある背景を探ると共に、すでに導入を行っている大学の事例から、サービスラーニングの導入過程と現状について明らかにすることを目的とする。

## 2. サービスラーニングの概要

### 2-1 サービスラーニングとは何か

#### 2-1-1 定義

サービスラーニングは、アメリカのデューイ (John Dewey) により提唱され、1960年代にアメリカの大学で導入されてきた教育手法である。一般的にはボランティア活動を活用した教育手法として理解されている。デューイはその著書『民主主義と教育』において「良い思考の習慣を学校で育成することが重要であり、その最初の段階は経験である」とし、市民を育成するために社会に出て、経験することの重要性を述べている。同様に『経験と教育』において「学習者個人と社会との両方の目的を達成するための教育は、—それはいつでもある個人の実際の生活経験—に基礎づけられなければならないという原理こそ堅実なものである」とし、座学あるいは学科教育ではなく、経験による教育の重要性を主張している。1990年代に「国家及びコミュニティサービス協会 (The Corporation for National and Community Service)」が設立され、全米で広く行われるようになった。しかし、アメリカにおいても、統一された定義はなく、以下のように多様な定義が用いられている。

① サービスラーニングは、地域社会に対するサー

ビスと学業上の興味・関心を結びつける教育方法論である。それは、批判的・省察的思考と市民としての責任感に焦点を当てているサービスラーニングのプログラムは、学生を系統だった地域社会サービスに組み込ませるものである。それは、地域のニーズに対応しており、学業上の技能や市民としての責任感、地域への関わり意識を成長させる。(Community College National Center for Community Engagementの定義)

② サービスラーニングは、学生たちが、人々とコミュニティのニーズに対応した活動に従事する中で学ぶ、経験的学修の一つの形であり、そこには意識的に学生の学びと成長を促進するように設計された構造的な機会が含まれている。内省と互惠がサービスラーニングの鍵概念となっている。(Jacoby associates, 1996の定義)

③ 「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム。サービス・ラーニングの導入は、(1)専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化、(2)将来の職業について考える機会の付与、(3)自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上、などの効果が期待できる」(中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』2012年8月28日の定義)

これらの定義から、

- ① サービスを行うことで、社会に対する影響を与えること
- ② 単なる体験ではなく、教育的取り組みとして構成されていること

の2つがキー・コンセプトを見出すことができ、多様な形で地域貢献を通じて、学生が学びと成長を得ることができる学習プログラムととらえることができる。

### 2-1-2 周辺概念との整理

サービスラーニングの周辺の概念として、「ボランティア」や「インターンシップ」、「フィールドワーク」などがあげられる。これらは、プログラムの組み立て次第では、サービスラーニングと見なすことも可能であるが、その目的においては図1のように区分けして考えることができる。

図1 「サービスラーニングと周辺概念との比較1」

	ボランティア	強制的「体験」ボランティア	実習・インターンシップ フィールドワーク
サービスラーニングとの比較	構造的な学習の枠組み 学びの目標とそれを誘発する仕組みがない。		学生の学習が目的であり、地域コミュニティへの貢献が明示されていない。

ボランティアであれば、その焦点がサービス（社会貢献）に充てられ利益を得る対象はコミュニティであると考えられる。逆に、インターンシップでは、学生の学習に焦点があり、その利益を得る対象も

学生に向いている。サービスラーニングはその中間点として、地域への貢献と学生の学びの双方を目的としている。

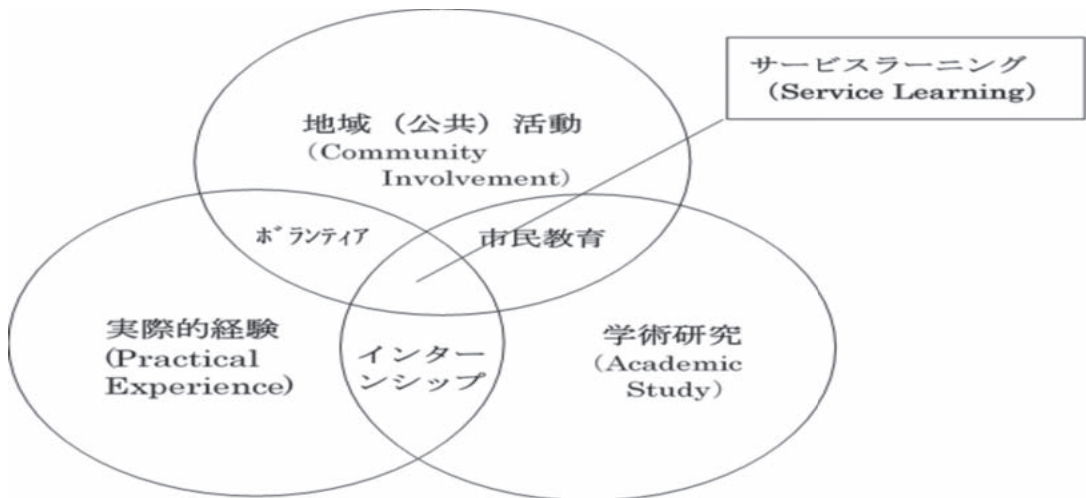


図2 「サービスラーニングと周辺概念との比較2」 (Christine Cress)

また、Christine Cressは、図2のように地域活動・実際の経験・学術経験の3つの重なりを示しサー

ビスラーニングと他の概念との整理をおこなった。地域活動と実際の経験の重なりをボランティア、

地域活動と学術研究の重なりを市民教育、また学術研究と実際の経験の重なりをインターンシップとし、3つの輪全てが重なる所、すなわち地域活動・学術研究・実際の経験が合わさった点こそサービスラーニングであるとした。

### 2-1-3 ボランティアの単位化とサービスラーニング

「ボランティア活動をそのまま単位化する」という考え方では、自発性に基づくボランティアの原則との矛盾や評価基準の曖昧さなどの疑念がおこる。しかし、サービスラーニングは、教育の枠組みの中で課されるサービスであり、厳密には自発性の伴うボランティア活動ではない。もちろん、教育を受けるにあたって本人の自主性が重要であることは他の教育と同じである。また、「ボランティアそのものではなく、ボランティアを通して進められる学びに焦点をあてることで、その評価を行うことも可能になる」<sup>(1)</sup>と考えられる。

### 2-1-4 サービスラーニングの教育効果と地域への影響

では、サービスラーニングを導入することによって得られる効果とはどのようなものか。ボランティア活動に参加する学生の教育効果は複数の研究結果より「ボランティア活動によって、活動者の認知発達が期待できる」「専門学習へと動機づけされ、またその理解が促進される」「ボランティア活動を通じて、市民的責任性や利他的意識を向上させることができる」(Astin & Aax, 1998) ことが明らかになっている。桜井政成によれば、『サービスラーニングの効果は第一に「高等教育を受けたものにふさわしい人間性・社会性の形成」、第二に「専門学習への動機づけと理解向上」、第三に「高等教育機関における社会貢献」<sup>(2)</sup>であるとしている。

また、サービスラーニングは地域社会における貢献もその目的にしていることから、地域への影響も考える必要がある。津上らによれば、学生の

ボランティア教育プログラムが地域にもたらす可能性について、第一に「学生が地域に「いる」という実在的效果」、第二に「学生が地域で活動することによる実在的效果」、第三に学生が地域に参加し、地域が学生を受け入れるという相互行為により、地域組織と教育機関をつなぐ仕組みが構築できることによる効果」を上げている<sup>(3)</sup>。

### 2-1-5 具体的な活動の種類とプログラムの進め方

アメリカにおいては950以上の大学が様々なプログラムを進めている。その活動は会計学・農業・文化人類学・考古学・建築学・芸術・生物学・商学・化学・科学技術・経済学・教育学・歴史・環境教育・音楽・哲学・法学・物理学・政治学・心理学・宗教学・社会福祉学・社会学などあらゆる分野に及び、それぞれの専門性を活かし、社会貢献を行うプログラムが開発されている。

また、単にボランティア活動を行うだけでは、サービスラーニングとは言えない。あくまでも、学習目的に沿った活動である必要がある。さらに、活動後に「振り返り」を行うことが重視されている。中村らの調査によれば、全米青年リーダーシップ評議会 (National Youth Leadership Council) のトール (Toole) はサービスラーニングのカリキュラムサイクルにPDSサイクルを当てはめ、3つのステップを示した。すなわち①Plan (計画、プロジェクトの明確化)、②Do (実行、サービスの実践)、③See (評価、学習の振り返りと新たな理解) である<sup>(4)</sup>。とされている。

## 2-2 サービスラーニングが大学に導入される社会的背景

現在日本においても、サービスラーニングを導入する大学が増えている。その背景には、阪神淡路大震災以降学生のボランティア活動が盛んになり、各大学でボランティアに関わる科目の開設が進むとともに活動を後押しするボランティアセン

ター等の部署の設置が進んだことがあげられる。さらに、ボランティアの教育的効果への注目と共に、文部科学省もその動きを後押ししてきた経緯がある。また、大学全入時代における「学士の質的な保証」のための教育改革という文部科学省による政策的な意図を読み取ることができる。

### 2-2-1 ボランティア活動の盛り上がりと教育への発展

1995年の阪神淡路大震災において、100万人を超えるボランティアが現地に駆け付け「ボランティア元年」と呼ばれた。このボランティアの主要な担い手となったのが、学生ボランティアであった。震災以降大学においても、ボランティア科目の設置やボランティアに取り組む学生を支援する部署を設置するところが増加してきた。日本学生支援機構の2006年の調査によれば、ボランティア経験がある学生は65%（現在している18.1%、現在はしていないが、以前したことがある47.1%）に達していた<sup>5)</sup>。大学による支援体制についても、特定非営利活動法人ユースビジョンが2008年に行った調査によると、学内外のボランティア情報の対応や学生に対する相談の部署設置について、15.6%は専門の担当部署を設置しており、57.2%が兼務での担当部署が設置されていた<sup>6)</sup>。2011年に発生した東日本大震災を機にこの傾向はさらに進んでいることが予想される。

政策面では、2002年になるが、中央教育審議会答申において「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」で、大学生を含む青年の奉仕活動を奨励・支援することが打ち出され、これらの動きを後押ししてきた。

### 2-2-2 「学士の質的な保証」としての文部科学省の方向性

一方、大学全入時代を迎え大学の在り方についても、大きな変化が起きている。文部科学省では2005年1月28日中央教育審議会答申「我が国の高

等教育の将来像」において、高等教育機関の教育、研究、社会貢献の役割について提言を行っている。その内容は、世界水準の研究開発を産官学連携で行う「研究型大学」から社会教養の教育を主眼とする「教育専念大学」までの差別化である。大学側には、「研究」「教育」「社会貢献」のどこに重点を置くかの選択を迫られることとなった。2008年12月24日中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、「21世紀型市民」の育成を目指し「多様で質の高い学士課程教育を実現する」としており、教育方法の課題として「何を教えるか」よりも「何ができるようになる」に力点を置き、学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのような刺激を与え、主体的に学ぼうとする姿勢や態度を持たせるかは極めて重要な課題であるとした。その改革の方向として、「学生の主体的な参画を促す授業や学内にとどまらず積極的に体験活動を取り入れているかについて、改めて点検・見直しが必要である」とした。

さらに、2012年8月28日中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」においては、生涯にわたって学び続けるチカラ、主体的に考える力を持った人材は、従来型の知識伝達型の授業ではなく、能動的学修（アクティブ・ラーニング）が重要であるとした上で、インターンシップや留学体験と共に「サービスマーケティング」等の教室外学修プログラムなどの提供が必要であるとした。特に、地域社会や企業等と大学が連携した取り組みとして期待されているとした。2012年6月に文部科学省が示した「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」においても、これまでの答申を踏まえ大学教育の質的転換のための取組として「課題解決型の能動的学修を中心とした教育へと転換する必要」とし、大学COC（Center of Community）機能の強化として、「フィールドワーク等を通じて、学生が社会の現実の課題に参加することで実践力

を育成。」とし、実質的にサービラーニングの導入についての提案がなされている。

### 3. サービラーニングを導入した大学の調査

では、実際の大学ではどのようにサービラーニングが導入されているのだろうか。先駆的に導入した大学に調査を行った。調査は、各校の報告書、論文、ホームページやヒアリングに基づきまとめを行った。

#### 3-1 先進大学の調査

##### (1)国際基督教大学

大学の概要

学生数：2,918人（学部生）、

学部数：1学部（教養学部）

サービラーニングの定義と理念

サービラーニングは、単なるボランティアとは違うといわれます。サービラーニングは「学生が自発的な意思に基づいて、一定の期間、無償で社会奉仕活動を体験し、知識として学んだことを体験に活かし、また体験から生きた知識を学ぶ教育プログラム」と言えるでしょう。サービラーニング活動を単位として認定する仕組みは、アメリカの多くの教育機関で取り入れられています。（国際基督教大学サービラーニングセンターホームページより）

サービラーニング（センター）導入の経緯

コミュニティ・サービラーニングは、国内のNPO/NGO、公共機関、地域社会などでサービラーニングを行うもので、1999年にスタート。2003年度よりService Learning Asia Network (SLAN) を作り、学生交換を行っている。サービラーニング・センターは、2002年10月に設立。2003年よりアジア地域の高等教育機関とネットワークを形成して、サービラーニング学生交換を実施。2005年には文部

科学省の補助金事業（戦略的国際連携支援）に採択され、特に国際的なサービラーニング分野で発展。2012年にサービラーニング・センター設立10周年を迎え、様々な記念事業を開催。

科目

講義（座学）

サービラーニング入門（2単位）・サービラーニングの実習準備（1単位）

サービラーニング経験の共有と評価（1単位）・サービラーニング特別研究Ⅰ（2単位）

サービラーニング特別研究Ⅱ（2単位）

実習コース

コミュニティ・サービラーニング（3単位）

国際サービラーニング（3単位）

推進体制

組織名：サービラーニングセンター

体制：教員1名、事務職員3名

##### (2)立命館大学

大学の概要

学生数：7,017人（学部生）、学部数：13学部（法学部・経済学部・経営学部・産業社会学部・文学部・理工学部・国際関係学部・政策科学部・情報理工学部・映像学部・薬学部・生命科学部・スポーツ健康科学部）

サービラーニングの定義と理念

大学における学びと社会における諸課題の解決を具体的な実践活動を通して結合させていく学びの手法です。このような視点から実践される様々な社会貢献活動によって、双方向の人間関係を育み、学生のみなさんが市民としての資質や社会性を高め、課題解決力、チームとしての実践力などを高めていくこと。（立命館大学サービラーニングセンターホームページより）

サービラーニング（センター）導入の経緯

1995年阪神淡路大震災を機に学生により、「ボ



ランティア情報交流センター」が設置される。  
2004年に大学ボランティアセンターを設置。  
2008年ボランティアセンターを共通教育推進  
機構サービスラーニングセンターに改称。

#### 科目

地域参加学習入門 / 近江・草津論 (2単位)、  
シチズンシップ・スタディーズ I / 地域活性  
化ボランティア (2単位)、現代社会のフィ  
ールドワーク (2単位)、シチズンシップ・スタ  
ディーズ II (2単位)、ソーシャルコラポー  
レーション演習 (2単位)、全学インターンシップ  
(2単位)、ボランティアコーディネーター養  
成プログラム (5科目のパッケージ10単位)

#### 推進体制

組織名：サービスラーニングセンター  
体制：教員3名、専門コーディネーター3  
名、事務職員2名

### (3)筑波学院大学

#### 大学の概要

学生数：480人 (学部生)、学部数：2学部 (経  
営情報学部・情報コミュニケーション学部)

#### サービスラーニングの定義と理念

導入に当たっては、サービスラーニングの導  
入という考え方ではなく、「社会力」をいかに  
大学で身に付けるか、育てることができるか  
ということでプログラム (実質的にはサービ  
スラーニングプログラム) を導入。「社会力」  
とは、自らの意志で社会を作っていく意欲と  
その社会を維持し発展させていくのに必要な  
資質や能力ととらえている。

#### サービスラーニング導入の経緯

平成17年の大学開学に合わせ、「社会力のある  
人間の育成」を実現するための教育プログラ  
ムとして、「つくば市をキャンパスにした社会  
力育成教育」～オフ・キャンパス・プログラ  
ム (Off Campus Program) ～を導入。

#### 科目

実践科目A (2単位、1年次必修)、実践科目  
B (2単位、2年次必修)、実習科目C (2単位)  
推進体制

組織名：OCP推進室  
体制：教員8名、専門コーディネーター1  
名

### (4)恵泉女学園大学

#### 大学の概要

学生数：1669人 (学部生)、学部数：2学部 (人  
文学部・人間社会学部)

#### サービスラーニングの定義と理念

CSL (コミュニティサービスラーニング) とは、  
教室で知識を詰め込むだけの教育から一歩外  
を出て、自分で考え、行動する力を育てる、  
そして、体験を通して生きた知識を学び、自  
己理解を深めていくプログラム (恵泉女学園  
大学ホームページより)

#### サービスラーニング導入の経緯

2001年人間環境学科の開設時に、地域に根ざ  
して「人間と自然環境の共生」を実践する市  
民を育成することを教育目標としフィールド  
スタディを設置。2005年日常のかつ継続的に  
現場を体験する科目として、コミュニティ  
サービスラーニングを設置。身近な施設や組  
織においてボランティア的な活動を行うこと  
を主体とした体験学習である<sup>(7)</sup>。

#### 科目

サービスラーニング方法論 (1単位)、コミュ  
ニティサービスラーニング I (2単位)、コ  
ミュニティサービスラーニング II (2単位)、  
コミュニティサービスラーニング III (2単位)

#### 推進体制

組織名：体験学習委員会  
体制：教員1名

### (5)日本福祉大学

#### 大学の概要

学生数：5,276人（通学課程・学部生）、学部数：6学部（社会福祉学部・経済学部・福祉経営学部（通信教育）・子ども発達学部・国際福祉開発学部・健康科学部）

#### サービスラーニングの定義と理念

サービスラーニングとは、1980年からアメリカで始まった教育活動の一つであり、「社会活動を通して市民性を育む学習」です。具体的には、「見返りを求めない伝統的なボランティアの概念に基づくものの、しいて言えば『学習』を見返りとして、ボランティアサービスを提供する学生側とそれを受ける側とが対等の互酬関係に立ち、学生がボランティア活動の経験を授業内容に連結させ、学習効果を高めるとともに、責任ある社会人になる為に行うボランティア活動」といえます。（参考「ボランティア白書1999」日本青年奉仕協会）（日本福祉大学サービスラーニングセンターホームページより）

#### サービスラーニング導入の経緯

平成20年度に文部科学省教育GPにおいて「協働型サービスラーニングと学びの拠点形成」が採択されたことを契機に、サービスラーニングに本格的に取り組み初めた。

#### 科目

社会福祉基礎演習（4単位・2年次）

#### 推進体制

組織名：サービスラーニングセンター

体制：教員5名（2014年度からは7名）、

専門コーディネーター1名（2014年度からは2名）

### 3-2 調査から見てきたもの

#### 3-2-1 サービスラーニングの定義と理念、導入経緯

サービスラーニングの導入の経緯は、各大学それぞれであるが、共通点として「大学の理念」に基づいた理念を読み取ることができる。また、サー

ビスラーニング導入の目的として、社会的スキルを身に着けることを目的とし、初年次教育の2年次として位置づけられているもの（筑波学院大学）や大学での学びを活かし専門教育につながる機会ととらえて実施している（日本福祉大学、立命館大学）ものもあった。さらに、他の大学では、教養教育の一環としてサービスラーニングを扱う所もある。どの大学も、サービスラーニング導入前より、地域とのつながりがあり、体験学習やインターンシッププログラムを持っており、「サービスラーニング」という概念により、それらの科目を再度整理したことがうかがえた。

#### 3-2-2 科目

カリキュラムの組み立てとしては、座学中心の授業を受講した上で、活動に進むパターン（恵泉女学園大学）や、一つの独立したプログラムやプロジェクトをもっており、事前・事後の振り返りを含め、そのプログラムへの参加を通して学びを深めていくなどの形式（立命館大学）があった。また、授業の形態としては、「座学型」「多様な活動先への送り出し型」「特定プロジェクトへの参加型」「自主的活動の単位認定」などが見受けられた。受入れ先となる活動内容は多岐にわたっていたが、その大学の学生の学びにつながりやすい活動に配慮されていることがうかがえた。（日本福祉大学→福祉系NPOへの体験等）

#### 3-2-3 推進体制

恵泉女学園大学を除く大学では、サービスラーニングセンターを立ち上げ、教員や専門職員を配置している。主な役割として、受け入れ先となる地域とのつながりやサービスラーニング科目になるプロジェクトに対するサポートなどを行っている。



#### 4. おわりに～聖学院大学におけるサービ スラーニング導入の可能性～

最後に、サービスラーニング科目の聖学院大学への導入について考察を行う。ここまで述べてきたとおり、サービスラーニングを導入した大学では、大学理念や学部・学科の構成などにも影響を受けている。聖学院大学は、「神を仰ぎ、人に仕う」を理念にキリスト教主義の教育を行っている。また、「学則」において第2条で民主的社会人の育成をうたっている。

サービスラーニングの導入は、その理念の具現化として位置づけることができる。学科編成上も、人間福祉学科、児童学科、子ども心理学科、コミュニティ政策学科など、対人支援の専門家養成や地域のまちづくりなどNPOなどで活躍できる人材養成を目指しており、学生にとっても、大学の専門の学びと実践への橋渡しをしてくれる機会になることが予想される。人文学部においても、地域の文化発信や国際交流などの視点から科目を設置することも十分考えられる。アクティブラーニングの導入も進められている現在、その一手法としてサービスラーニングは「入って伸びる大学」の具体的な中身になり得ると考えられる。

同時に、導入に当たってはいくつかの課題を検討する必要がある。一つは、カリキュラム。恵泉女学園大学のように、基礎編と多様なNPOへの送り出しを行う形式や、筑波学院大学のように初年次教育と連動した形式、さらに立命館大学のような具体的なプログラムを持った形式など、多様な実施方法からどのような形式で実施するかを整理する必要がある。

二つ目は、送り出す学生の規模についても検討が必要である。筑波学院大学のように、初年次教育として、すべての学生を地域に送り出す場合、調整には多くの負担がかかることになる。また、受け入れ団体とのミスマッチにより、受け入れを拒絶されるなどの事例も起こることが想定される。

進路につながる意識の高い学生のみのプログラムが、基礎教育として多くの学生が必修に近い形式で取り進むかによっても大きな違いがある。

三つ目は、推進体制があげられる。聖学院大学では既に2012年度からボランティア活動支援センターが発足し、2013年度からは地域連携・教育センターが発足。専任のコーディネーターがいることで受け入れ先となる地域との連携が築かれつつある。しかし、現状ではあくまでも学生の自主性によるボランティア活動の調整であり、教育プログラムであるサービスラーニングとするには、コーディネーターと協力しながら事前学習・事後の振り返りなどを専門の教員がプログラム作りに関わる必要があると考えられる。

#### 参考引用資料

1. 栗田充治『大学におけるサービスラーニング（ボランティア学習）』亜細亜大学国際関係紀要 20、2011年
  2. 桜井政成「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」サービス・ラーニングの全学的展開を目指して「立命館高等教育研究」第7号、2006年
  3. 津上正敏・日紫喜あゆみ「地域活性化における学生参加の意義と可能性—地域と大学の連携課題—」『ボランティア教育の新天地 サービスラーニングの原理と実際』ミネルヴァ書房2009
  4. 中村知子、藤原由美、三浦智恵子『サービスラーニング授業の開発』自由が丘産能短期大学紀要no43、2010年
  5. 独立行政法人日本学生支援機構『学生ボランティア活動に関する調査報告書』独立行政法人日本学生支援機構、2006年
  6. 特定非営利活動法人ユースビジョン『地域貢献活動による学生の学びと成長を促すために 大学ボランティアセンターに必要な3つの機能』特定非営利活動法人ユースビジョン、2009年
  7. 山本悦子『恵泉女学園大学のコミュニティ・サービス・ラーニング』教育學術新聞第2285号、2007年
- ・ジョン・デューイ著 市村尚久訳『経験と教育』講談社学術文庫、2004年
- ・ジョン・デューイ著 松野安男訳『民主主義と教育(上)』

- 岩波文庫、1975年
- ・ジョン・デューイ著 松野安男訳『民主主義と教育(下)』  
岩波文庫、1975年
  - ・Christine Cress 『Service-Learning and Civic  
Engagement :Definitions and Strategies』 2013年
  - ・津止正敏 桜井政成編者 『ボランティア教育の新地平—  
サービスラーニングの原理と実践』 ミネルヴァ書房、  
2009年
  - ・サラ・コナリー マージット・ミサンギ・ワッツ 『関係  
性の学び方—「学び」のコミュニティとサービスラー  
ニング』 晃洋書房、2010年
  - ・富田沙樹、近森節子、徳永寿老、真田陸浩 『立命館大学  
における「サービスラーニング」モデルの構築』 大学行  
政研究第4号、2009年
  - ・筑波学院大学『現代的教育ニーズ取組支援プログラム「つ  
くば市をキャンパスにした社会力育成教育」最終報告書  
(平成20年度)』 筑波学院大学、2009年

(かわた・とらお 聖学院大学ボランティア活動支  
援センター 兼 地域連携・教育センター アドヴァ  
イザー)